



第18号

発行

筑波山がまの油売り口上研究会

「がまの油」と「がまの油」

の使い分けを！

会長 林 正一

平成二十年度、会員の皆様には大変お世話になりました。

特に、茨城県フラワーパークや古河市桃まつり、さらには筑波山ガマまつりなど各種イベントにご協力いただき、誠にありがとうございました。平成二十一年度も引き続きよろしくお願い申し上げます。

ところで、現在、「がまの油売り口上」を伝承しようと練習している団体が、確認されているだけで全国に三つあります。

まず一つ目は、平成十一年十月に設立された「筑波山ガマ口上保存会」。そして、半年後の平成十二年四月に設立した私どもの「筑波山がまの油売り口上研究会」であります。さらに、最近になって滋賀県大津市に「近江国伊吹山がまの油口上保存会」が設立され活動を始めたようです。

私どもの『がま研』は、設立当時から会の名称を平仮名の「がまの油」で表記してまいりま

を制作される際には、十分にご配慮賜りますようお願いいたします。

いずれの団体も、観光の振興並びに地域おこしに寄与することを目的として、多方面に亘り活動されておられる点では共通していると思えます。まして、地域の活性化を図る上では、いろいろな分野で活躍する多くの団体や市民の協力が不可欠であり、相互に連携していくことが最も重要であると考えております。

今後とも、会員の皆様におかれましては、茨城県の観光PRはもとより、筑波山周辺の観光発展のため、保存会の皆様と協力し合い、少しでもお役に立つことが出来ますよう日々研鑽に励み、ボランティア精神に基づき、益々活躍されますよう期待するものであります。

お互いに力を合わせ、平成二十一年度も大いに頑張りましょう！



言語壁の戦い

曹操が挑んだレッドクリフ（赤壁の戦）ならぬ言語壁の戦いを受けて立った。聞こえはいいが、恐れ多くも国際学会の懇親会でのアトラクションのことである。

デイス イズ ア ペンと教わった身には、ネイティブな発音は高嶺の花。それでも一心不乱に暗記に励み、外人の先生の指導も仰ぎ、何とか口をついて出るまでに漕ぎつきはした。しかし、英語には口上で演じるような、独特の抑揚がないらしい。一生懸命しゃべってみても、しよせんはジャングリッシュ、理解してもらえないかどうか、怪しいものだ。

不安を抱えて迎えた当日、事前につくばね会で練習させていただいたのが、どれほど役立ったことか。一回目は英語、二回目は大事をとって日本語での挑戦とさせていただく。温かい拍手はいただけたけれど・・・。

結果は―英語圏の人ばかりではない―だ。つまり、英語での努力も英語圏以外の人には通じない。深く考えずに堂々と日本語で演じて、その勢いを感じてもらおうのもありかも、と。

それでも、錆付いた頭にアルファベットを流し続けた日々はそれなりに楽しかった。この戦い、まだまだ勝敗は決していない。言語壁への挑戦はあきらめずにいたいと思っている。

最後に、ジョイントした池田さんの『玉すだれ』は大うけであったことを報告し、勇気ある依頼主に感謝したい。

(田神 まゆい)

東京に隣接する埼玉県の西北から南部にかけて荒川が流れている。この川を境にして一方は関東平野に連なり、他方は三百メートルから二千メートルほどの山々となっている。川の表情が一変し、やがて長瀬になる。あたりの山々は次第に高さを増して、谷は深く、先へ行くにつれ谷は広がり、そこにわずかの平地がある。ここが秩父の盆地である。

平成二十年四月十五日、しだれ花桃、桜、山つつじといろんな花が満開であった。二台のバスで花のトンネルを抜けて通る二泊三日の旅、妻を従って三四ヶ所の寺院を参拝した。西国三十三、板東三十三、秩父三十四を合わせて百観音であり、今年には十二年に一度行われるその百観音の総開帳の年に当たる。最後の晩は労を労う宴会が、歌に踊りと、華やかに行われる。

その前にと、一通りのセレモニーが終わって十分位あとで、浴衣姿にタスキ、ハチマキ、最少の置物で即席の出で立ちであった。幕が開き、ライトに照らされ、大声で今宵の前座を述べ始めた。皆はびっくりした顔で、目を見張っていた。口上の最後の腕を切る所では、絵の具をたっぷり塗り思い切り赤くしたもんだから大変！一人の先輩がステージに上がり「お前そんなに手を切つて明日どうすんだが？」と詰りめ寄られて困ってしまった。

「どうれー見せて見る。こんなに真っ赤にな

秩父路のがま

稲葉 茂

つてしあんめいな。「これは手品だから大丈夫心配はないから。」と言ったら降りて行った。最後にお札を述べて、大きな拍手でステージを跡にした。

宴席に戻って一息入れたら、私の席の前に座った六十代の女性の方が、「私は筑波のガマを行う畳屋から狸穴に嫁いで来たの」といわれた。それでは、あの十七代名人の娘かと思ひ至り、一瞬気の引き締まる思いであった。

誰が見ているかわからない多くの人前で演技は、真剣に演じなければならぬと、心に止めた一瞬であった。

旅は道連れガマと巡った秩父路であった。



自分で言うのもおかしいが、「いい顔」だ。

「つくばね会」の宇野相談役とのツーショット。普段魑魅魍魎の世界に身を置いていると、こんな笑顔はめったに表れない。「つくばね会」だからこその表情。

近藤 博

「いい顔」について

これまでの僕は、典型的な無芸大食。休日には女房から、「何かすることないの」と追いつてられていた。いくつか趣味の候補はあった。室内では囲碁、屋外では溪流釣りなどだ。ところが、「実行しないで考えている」期間がなんと十年以上になってしまった。

そんな中、一昨秋、「がまの油売り口上」と巡り合うことができた。土曜日には病院ボランティアをしているので、講習会には参加できなかったが、林会長から紹介された「つくばね会」への入会を許された。宇野相談役をはじめ、会員の皆さんのご指導により、昨年「あすなろの里」でデビューさせていただいた。とはいえ、車の運転でいえば「若葉マーク」までいっていない。路上に出る前の仮免受検の段階ではないか。

僕は、週五回五十分位早朝ウォーキングをしている。その間、二回口上の練習をする。先輩の皆さんどなたも仰るように、芸事は奥が深い。この練習は死ぬまで続けるつもり。「がまの油売り口上」を生涯の趣味としたいから。

ところで、今年八十四歳になる母親が、「がまの油売り？それってやぐざの集まりじゃないの、大丈夫？」と心配していたが。

「がまの油売り口上研究会」の林会長、「つくばね会」の寺田会長、宇野相談役、そしてすべての会員の皆さんに出会えたことを、幸運に思っています。これからどうぞよろしくお願いいたします。

もう六年前になります。平成十五年三月、当地に長く伝わる、なんと七十二に一度の「奇祭」

「金砂（かなさ）大祭礼」が行われました。これは金砂の神が最初に日立の水木の浜に現れ、金砂山に鎮座されたという謂れから金砂郷町の西金砂神社と水府村の東金砂神社（現在は町村合併により共に常陸太田市）を出発した行列が古式にのつとり、往復七十五キロを巡行し、水木の浜で深夜神事を行い、途中七ヶ所で天下泰平・五穀豊穰・万民豊樂を祈願する田楽舞いを披露しながら六泊七日かけて約五百人の大行列が元の神社に帰還されるお祭です。

本祭礼は七十二年ごとに行われますが、小祭は西金砂神社でのみ六年に一度行われ、途中の常陸太田市馬場まで渡御します。したがって今年はお祭の年になりません。

平安時代の西暦八五一年に第一回を執行して以来一度も途絶えることなく、前々回は昭和六年、前回は平成十五年に第十七回目が行われました。

祭好きの私は、生涯一度のチャンスとばかり延べ三日間、追っかけて見て回りました。祭の解説書、参考書も沢山買いました。でもどうしても分らなかつたのが、行列の馬印 提灯でした。何の印か誰の紋所なのかと、そのことについての記事解説は見つかりませんでした。

昨年、鎌倉在住の佐竹の縁者が常陸太田市で開いた展示会を見落としたので、一部資料が保

「奇祭」72年に1度の「金砂大祭礼」として 佐竹・徳川の係わり合いについて

管されている郷土資料館にゆきましました。またその展示会を記念してその後販売された、そば饅頭「佐竹の郷」清酒「佐竹」も買って調べてみました。「佐竹氏伝来軍扇」が写真ですが保存されていました。

佐竹寺には佐竹の紋所「五本骨扇に月丸」がありました。（文末参照）なんとそれは行列の馬印なのです。祭りの一行は徳川二五〇年の歴史を超えて、それ以前の五百年の佐竹を偲び祭っていたのでしょうか。祭りとはいえ、どうしてそんな事が許されたのでしょうか、信じられない事です。そしてそんな特異な内容をもつ祭なら、偉い先生方がどうして説明されないのでしょうか。

私の結論は「民衆のガス抜き」でした。しかし、説明されない理由は分りません。佐竹は豊臣政権時代、徳川、前田・島津・上杉・毛利とならび「天下六大名」の一つに数えられ、五十四万石を領していました。しかし関が原の戦いの際、態度を鮮明にしなかつた事を咎められ、秋田二十万石に移封されました。

五十四万石から二十万石への改易転封、これは何を意味するのでしょうか。この時代、つまり江戸幕府初期の諸侯家臣団の軍役高（石高）に相当する基準人数は、一万石につき二百人前後といわれています。

したがって五十四万石当時一万人程度の藩士を抱えていた佐竹藩は、わずか四千人程度の藩士しか秋田に引率出来ない事態に立至つたの

です。進駐してくる徳川は、旧武田藩士を中心に尾張・三河よりの武士で充当する訳ですから、現地採用はまず無かつたと思われ。七千人からの家臣は泣く泣く残留し、常陸の地で多くは帰農するなどして土着していったと思われ

ます。そんな土地を治める徳川の辛苦は、並々ならぬものがあつたと思われ、何かの折に噴出する「ガス」を、せめて七十二年目の祭には大目に見ることで抜いていたのではないのでしょうか。

五年前の祭の折に感じたいろいろな疑問を今度の小祭でどこまで説明出来るのか、それまでの間に、もうすこし佐竹の水戸進出と秋田移封、武田信吉の水戸配置と水戸藩の成立過程などを調べてみたいと思っております。

清 水 泰 清



五本骨扇に月丸
(清和源氏義光流)

佐竹家の家紋は『扇に月丸』である。家紋は黒白で表すため『月丸』はときに『日の丸』に誤られることが多いが、正しくは『五本骨扇に月丸』である。

イタリア旅行記

大川 ちよの

『光陰矢のごとし』月日のたつのは早いもので、最近は何にその速さを実感しています。

私も昨年は、とうとう還暦を迎えてしまいました。還暦というと、凄く老け込んだ感じがしましたが、自分がその年になってみると、まだまだ高齢者の仲間入りは早すぎるといのが実感でした。高齢者の仲間入りをする前に、また足腰が丈夫なうちに海外も見歩いて歩きたいと思いい、一月末からイタリアへ行ってきました。

古い街並み、荘厳なるゴシック建築、レオナルドダビンチが描いた『最後の晩餐』など目を見張るものばかりでした。ベスビオ火山の噴火により埋没した世界遺産ポンペイ遺跡など、日本では縄文時代に建てられたと聞き、古代文化が進んでいたことに改めて感動しました。

世界で一番小さい国ヴァチカン市国では、ローマ法王がいるヴァチカン宮殿も言葉では言い表せないすばらしいものでした。建物の中に描かれている絵も目を見張るばかりで、十六世紀にこのようなものが造られ、現在まで保存されていることに、改めて感動を覚えました。日本にも世界遺産になっているところが数

多くありますが、今回見てきたイタリアの世界遺産は、どこを見ても素晴らしいものばかりでした。外国の文化に触れ、また日本の良いところないが発見できるのではないかと思いません。

これからも、体が元気なうちに、外国の素晴らしい文化に触れてみたいと思えます。

映画「劔岳 点の記」

地図と山の大好きな佐藤が、今年の映画大作を紹介します。

明治政府における日本地図作成において、最後の空白地点が富山県にあった。標高3kmの「劔岳」である。

この映画「劔岳 点の記」は明治40年、その山の険しさ、神秘さから未踏峰と云われた劔岳に、謎めいた行者の言葉「雪を背負って登り、雪を背負って降りよ」を手掛かりに登頂ルートを探し、陸軍の威信にかけて日本地図完成のために実際に挑んだ測量隊7人の真実の物語です。

現地「劔岳・立山連峰」でのロケーションは2年間で200日以上、作り物でない本物の自然と人間を織り込んだ本物の映像が展開されます。平成21年6月20日全国ロードショーです。

是非ご覧ください。 (佐藤貞弘)

原作・新田次郎、監督・木村大作

出演者・浅野忠信、香川照之、松田龍平、

宮崎あおい、仲村トオル、役所広司

小澤征悦、井川比佐志、國村隼、夏八木勲



【ご注意】六月六日には役所広司監督・主演の映画「ガマの油」も全国ロードショーとなりますが、株のデイトレーダーの夫とその妻とのかかわりを描いたものですので、お間違いないようお願いいたします。



ヴァチカン広場



トレヴィの泉

編集 後記

花粉のピークもあと少し。屋外の心地よい声だしの季節到来です。数々の玉稿に感謝しつつ、次の原稿をお待ちしております。

編集 集子